
四季

ばう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四季

【Nコード】

N5362A

【作者名】

ばう

【あらすじ】

四季を経て移り変わっていく主人公の心を描く青春ストーリー。
果たして彼はどちらを愛していたのか…

第一部：はじまり

『僕らは何かを為すために生きている。何かを為すために生まれ、その役割を為してこそそれまで生きてきた又これから生きていく意味があるんじゃないだろうか…』

ある国では出会いは全て神の意思であり、又ある国では出会いは前世の縁だそうだ。

僕と君は出会った運命・縁で、僕は君に何の役割を為すために生まれて来たのだらう…』

僕はここで物思いにふけることが好きだ。学校の屋上は放課後にはほとんど人が来ないので、物思いにふけるには丁度良い場所なのだ。僕は思い浮かんだ言葉が声に出してしまう質なので尚更丁度良い。

ここで物思いにふける時は決まって反省したい時か落ち込んだ時だ。今日は前者であり、何を反省しているのか察してくれるだろうか…。

僕と彼女が知り合ったのは、高校に入学して最初のロングホームルームで良く言えば譲り合い、悪く言えば擦り付け合いの委員長決めの時だった。

僕は子供の頃から犠牲心が強く自分ではそう思わないし、良かれと思っただけだ。僕が面倒な役を買って出て、

「皆さんは高校生活を楽しんで下さい。」

といういかにもおこがましいことはこれっぽちも思っていない。

誰も手を挙げないだろうと思い、学級委員長に立候補しようと手を持ち上げた。すると一つ席を挟んで隣の彼女も手を挙げていた。僕

はまだ彼女のことを知らなかったし、彼女に恋心を抱くとは思っても
よらなかった。

『学級委員長 小笠原 美久』『副学級委員長 犬神 翔太』と書
かれた黒板の名前を見て小笠原の名前を知った。それから一年の間、
時間的に、空間的に一緒にいることがなぜ多かった。その中で、
少なくとも僕は小笠原に親しみを感じたし、毎晩月が出るように自
然な関係だったと思う。

一体いつから僕は小笠原に惹かれていたのだろうか、そして、小笠
原は僕のことをどう思っているのだろうか…。

今年も運良く小笠原と同じクラスになり、高校生活二年目になって
一週間が過ぎた。僕と小笠原は去年一年の間で他人から友達になり、
お互いを理解し合えるようになったが、僕はそれだけでは不十分だ。
もっと小笠原を知りたい、小笠原の近くにいたい、小笠原に頼って
もらいたい、そして、一回でも良い心の支えになりたい。

第二部：学校へ

「またここにいた」

急に耳元で声がして、人がいることに気付くと恥ずかしさから顔が紅潮してきた。慌てて振り返ると、そこには中林 京子がいた。

京子は近所にある空手道場の娘で、子供の頃から家族ぐるみの付き合いだ。僕は姉弟のように育てられ、僕を道場に引きずり込んで空手を教えてくれたのは京子であり、僕が苛められていた時にはすぐに飛んで来て僕を助けてくれて、そして慰めてくれたのも京子だ。

「いつからそこにいたんだよ!？」

「ずっと後ろにいたわよ。気付いてなかったの？」

「気付いてなかったよ。…声ぐらい掛けてくれよ」

「だから今、掛けたじゃん」

「掛けるのが、遅い!」

「ぼーっとしてる方が悪いの。ほら、帰るよ。」

「…はいはい」

僕は鞆をもちあげ、空を見上げながら僕と小笠原の出会いが縁であることを心の中で願った。

京子は今朝も空手部の練習があるらしいので玄関で別れた。少し力ビ臭い教室の中に入り、窓を勢いよく開けた。

登校する生徒がちらほらと校門をくぐって校庭をまっすぐ生徒玄関に入って来る。注意深く校門を見張っていると小笠原がやっと入って来た。偶然見つけたフリをしながら、小さく手を振った。小笠原も手を振って答え生徒玄関の屋根の影に消えていく。

しばらく教室のなかで静かに待っているとドアがカラカラと音を発して小笠原が入って来た。

「おはよう」

「…おはよう」

単純な言葉だが、僕は小笠原とこの言葉を交わすだけ緊張する。

「犬神君？」

挨拶を言ったまま小笠原を見つめてしまっていたらしく、不思議そうに僕を見ている。

第三部：学校で

『…えっ、いや…その…おはよう』

小笠原はクスツと笑って

『おはよう、犬神君！』

ああ、かわいいなあ。なんてかわいいのだろうか。見れば見るほど小笠原が愛しくなる抱き締めたくなるが、今まで築き上げてきた関係を決して壊したくない。ギュツと手を結んでこの衝動を我慢する。
『今日も早いんだね。』

『まあ…な』

『ねえ、手伝ってくれる？今日一限目体育だから用意するの大変なの。』

『先生探すだけでも大変だもんな。体育庫の鍵を持ってるのあの先生だけだし…。うん、手伝うよ』

『ありがとう』

『自分が体育館に着く前に準備されてないと先生機嫌悪くなるもんな…』

廊下に出て二人横に並んで歩きだした。廊下の朝の少しひんやりしていて空気が澄んでいる。外からは運動部の声が規則的なリズムをとって聞こえる。

無言のまま喫煙室や体育教師室を回り鍵を受け取って体育庫にあつと言つ間に到着してしまった。鍵を開け、坦々と準備をした。何もかもあつと言つ間で何もかもいつもと同じだった。

授業が全部終わり図書室へ行つた。本はあまり好きじゃないが、ここ最近では25冊くらいは読んだ。もちろん僕の趣味で読んでいるわけじゃない。小笠原が読んでいた小説を読んでいるだけだ。

この作品が図書室になかったので僕は4巻目に当たる

「アンの友達」

を読んでいる最中だ。ページをめくる度に紙のにおいと小笠原の香りを微かに感じる。

下校の時間です。校内に残っている生徒は速やかに下校して下さいという校内アナウスの流れだ。

ああ、もうそんな時間か…もう少し一緒に居たいな…。

『小笠原？下校の時間だって…まだ、読み終わってないから貸してくれる？』

『うん、いいよ』

第四部：放課後

実はもうとっくに読み終わっていた。4巻より5巻の方が若干厚いので読み終わってしまったのはしょうがないが、急かすのは心苦しいのだ。

僕は本を大切に鞆の中にしまい帰り支度ができたので、顔を上げた。

『あれっ?…』

小笠原が何かを懸命に探していて困った様子だ。僕は空かさず聞いた。

『どうした?』

『栞が…ないの』

『栞?無くしちゃったのか?……家まではこのレシートでも挟んでおけよ』

栞の代わりになればいいのだから無いよりはましだろう。

『…あ、ありがとう。でも……』

『?』

ふと小笠原の表情が暗くなる。エイトイレブンのレシートでは駄目なのだろうか。エイトイレブンのレシートをしまってフェアリーマートのレシートを取り出した。

『…そういうことじゃなくて……』

微妙なボケにクスツと笑ったが表情は暗い。

『どうした？』 『おばあちゃんの栞なの……』

いくら祖父の物を無くしてしまったからと言ってあまり怒られることもないし、僕なんかよく本に付いている栞を捨ててしまう方だから小笠原の顔が暗いのを不思議に思った。

『謝ってまたもらえ……ば……』

戸惑いは悲しみの表情に変わり僕はやっと気がついた。謝りたくても謝れないし、貰いたくても貰えない。つまり、もう小笠原の祖母はこの世にいないのだということに…

『ごめん……』

小笠原は黙って首を振る

『探そう…見つかるまで……』

『ありがとう……』

薄く溜まった涙の滴を指先で軽く払いながら言った。僕は早速身を屈め唯一無二の小笠原の宝物を探し出した。

しばらく探したのだが、栞はどこにも見当たらない。図書室には無いのではないのだろうかと思い始めた。

『小笠原？落とした場所に心当りはない？』

『私、今日図書室と教室くらいしか…あっ！？』

『心当りのある場所があったか？』

『体育道具倉庫っ！』

ちらつと時計を見た。

『運動部がまだ片付けしてるかもしれない！小笠原！急げ！』

僕たちは体育館に走った。

第五部：体育倉庫

走った甲斐もなく体育は部活生が帰ってしまつてしんと静まりかえつていた。

月の光が体育館を照らしある意味神秘的であり、ある意味不気味な雰囲気がある。窓もドアもしつかりと閉じられ体育は整然としている。

栞を探すのは明日になってしまいそうだと思いながら体育館を横切り、体育倉庫の扉に手を掛けた。

キー

『!?!』

なんと今日に限つて鍵をし忘れてくれたようだ。なんと有り難いことだろう。狭い部屋にはたくさんの体育道具所狭しと並び、部屋をさらに窮屈にしている。

早速体育倉庫の明かりを付け二人でバスケットボールの籠の下、跳び箱の中などくまなく探したが、見つからない。小笠原に目をやると臉に涙を溜めながら必死に探している。自分にエスパーでもあれば小笠原にこんな顔をさせずに済むのにと思いながら僕も必死になった。

ふと、時計を見ると9時を回っている。下校の時間遠に過ぎていた。

『小笠原、小笠原の家族も心配しているだろうからまたあしたにし

よう？明日も手伝うから』

『…』

『なっ？協力するから』

『うん。ありがとう、犬神くん…』

小笠原は涙目ではなくなったが、悲しい表情をしている。僕は、そんな顔を見たくない。

尾を引かれている小笠原の背中を押して、出口へ促した。倉庫を出ようとした時、小笠原は『あっ！？』と言う声と共に急にしゃがみ込み、感嘆の声をあげた。

『あつた！栞あつたよ！』

小笠原は急に振り返り鼻と鼻がくつきそうな位置に小笠原の顔があった。目からうれしい涙がこぼれ、頬を伝っている。

『良かったな』

『犬神くん、ありがとう！』
涙と笑みがこぼれている。

『見つけたのは小笠原だよ…』

『ううん、一緒に探してくれてありがとう。』

小笠原の息を感じ、胸の置くがキユンとなる。

『じゃ、帰るか。もう、だいぶ下校時間過ぎちゃったし……』

僕は体育倉庫を出て、玄関に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5362a/>

四季

2010年11月1日07時47分発行